

Somos Róbert, *Az alexandriai teológia*

(シヨモシュ・ローベルト 『アレクサンドリアの神学』)

Paulus Hungarus/Kairosz Kiadó, pp. 308, 2001, ISBN 963-93-0256-2

Catena monográfiák 1., A/5, 2300 Ft.

秋 山 学

2005年8月29日から9月2日までの一週間、ハンガリー西南部の中心都市ペーチにて、第9回オリゲネス学会が開催された。この学会の主催者を務めたのは、ペーチ大学のシヨモシュ・ローベルト教授とヘイドル・ジュルジュ教授であった。これを機に、ハンガリー語で記されたシヨモシュ教授の主著を紹介したい。教授はペーチ大学人文学部哲学史講座教授、2006年1月からは同学部の学部長である。教授には他に、中期プラトン主義に関する編著、および近現代ハンガリー人哲学者たちの系譜を辿った著書もある。広やかな視座に基づきつつ、一貫して、アレクサンドリア教父たちの意義を現代世界に問うという姿勢を貫く哲学者である。

本書は全体で8章より構成されている。本誌読者の方々にとって、たぶん本書を手にする機会は極めて少ないと思われるので、順に章題を紹介しよう。章、節、項の順序に区分されているため、節区分を「;」で、項の区分を「/」で、さらに小項がある場合には「,」で表すことにし、下位区分に及ぶことを「~」で表すものとする。「はじめに」および「序章」に続き、第1章「アレクサンドリアのフィロン——生涯と活動; 教説と神の存在について~神/ロゴス; 人間論; 哲学的背景~アスカロンのアンティオコス/エウドロス」。第2章「アレクサンドリアのクレメンス——生涯と著作; 信と知; 神~父/子; 人間論と倫理学」。第3章「オリゲネスの生涯と活動——オリゲネスとディダスカレイオン; 2人のオリゲネス?; オリゲネスの著作」。

第4章「オリゲネスの神学——神学の基礎；神論～父なる神／子なる神／父と子の関係／聖霊」。第5章「オリゲネスの靈魂論と人間論——靈の先在；靈の地上での生；靈の運命とアポカスタシス」。第6章「オリゲネスとギリシア哲学——ギリシア文化の有用性に関するオリゲネスの見解；オリゲネスと哲学諸派～エピクロス主義とアリストテレス主義；ストア派；オリゲネスとプラトン主義～オリゲネスと中期プラトン主義，アルキノオス（アルピノス），アッティコス，ヌメニオス；総括」。第7章「後3世紀のアレクサンドリア神学校——ヘラクラス；ディオニュシオス；テオグノストス，ピエリオス，ペトロス」。第8章「後4世紀のアレクサンドリア神学校——アレクサンドリア神学校とアレイオス主義の危機；盲目のディデュモス～ディデュモスの神学／宇宙論と靈魂論」。第9章「エヴァグリオス・ポンティコス——エヴァグリオスの生涯と著作；倫理学と人間論；靈魂論と宇宙論；神学；エピローグ」。末尾に「総括」が，巻末には文献一覧と聖書箇所・人物名の索引が付されている。

哲学・神学・聖書学・修道制・教会史・ユダヤ教・文献伝承史など，およそ総合的な視座のもとでの探究を求められるのが古代アレクサンドリア研究である。本書は，上記目次を一見しただけでも理解されるように，いわゆる「アレクサンドリア学派」と呼ばれるものの総体を，初頭から後4世紀に到るまで，極めて正統的な観点と構成で叙述した本格的な研究書である。中心となるのはオリゲネス研究であり，これを挟んで前後にフィロンとクレメンス，および紀元後3・4世紀のアレクサンドリア教校の神学者とエヴァグリオス・ポンティコスが配される。

まず第1・2章で扱われる二人の著作家は，本書全体の通奏低音を構成し，折に触れて中・後半でも二人の教説に言及がなされる。フィロンの「ロゴス」が意味する範囲は，超越論的な神の理性と，世界に内在する靈的知性の存在の間に広がる。クレメンスに関しては『ストロマテイス』第8巻も射程に収められている点が注目され，信仰と認識の関係をめぐる同書第2巻からの論証も光る。クレメンスの卓越性は，信と知の一致を，ギリシア哲学，グノーシスの伝承，神学的省察に基づいて展開したことにある。彼にあって，ロゴスは超越論的なヌースとして，創造世界の存在論的な原理であり，かつ人間論的な連関を持つがゆえに，倫理的な「介在」の役割をも果たす。クレメンスが，オリゲネスに比して無受動（*apatheia*）を強調した点にも注意が喚起される。

次代のオリゲネスは，教理学校首領として組織的に神学を展開した。プロティノ

ス／オリゲネスの評伝作家としてのポルフェリオス／エウセビオスの比較、あるいは「キリスト教徒で多作家」「寡作のプラトン主義者」という「二人のオリゲネス」仮説の検証がなされる。オリゲネスにおける聖書注解とホメロス注釈の関係、クレメンスとオリゲネスに認められる用語の共通性、当時の言語理論との接触などの論証に厳密さが光り、また『原理論』を基にした教義学・基礎神学的な考察も緻密である。アポカタスタシスの初例がアリストテレス『大倫理学』にあるという重要な指摘もなされる。オリゲネスの神学論では、総じて「霊の先在」が強調される。

オリゲネス論では、ギリシア哲学との関係を扱った第6章が白眉である。グノーシス主義研究とは明確に一線を画すことによって、哲学学説史上の検証作業が明瞭になっている。総じてオリゲネスはギリシア哲学を熟知していたが、特に特定の派に依拠するということせず、批判的・止揚的に、そしてこれを超えるべく思索した。オリゲネスはプラトンを最も評価するが、これはアレクサンドリアの伝統である。彼は、キリスト教著作家の中では例外的に、ストア派の論理学をも知っていた。また彼は、「発出」という概念的アプローチでもって2つの神格の関係を説こうと試みた。オリゲネスは、神人関係についてはプラトン哲学に合致するものだけを取り入れ、その際中期プラトン主義が基盤になっている。著者は、フィロン、クレメンス、そしてオリゲネスを取り巻く知的環境をもって「中期プラトン主義」と定義づける。次世代の著述家たちのうち、アルキノオスにあっては、オリゲネスにおける世界ないし世界靈魂と比較して、単に超越論的な神的存在者が問題となる。あわせて、上述したオリゲネスにおける「発出」の契機は、同時代の哲学者の概念と比較しても動的な特徴を持つ点に着目がなされる。アルキノオスにはアリストテレス的な要因が強く、オリゲネスへの彼の影響は否定的に結論づけられる。アッティコスには文献学的特徴が顕著であるが、彼にとって、アリストテレス批判の主たる源泉はヌメニオスである。ヌメニオスは「プラトンとは、アッティカ語で語ったモーセ以外の何者であるか」という文で著名であり、クレメンスにも彼の名が出るが、ユダヤ・キリスト教の環境にかなり馴染んだ思索家であった。ヌメニオスはオリゲネスにとって重要であったが、それはヌメニオスが、宇宙論・世界靈魂論・神の二神格概念等において新プラトン主義的原理を先取りしていたからである。

古代末期への移行を扱う末尾三章でも、実証的な手法は変わることがない。叙述は、アレクサンドリア教校長の系譜として、まずオリゲネス(203-231)→ヘラクラス

(231-232) →ディオニュシオス (232-248) →テオグノストス (248-282) →ピエリオス (282-?) →セラピオン→ペトロス (?-300) という伝統的な説が引かれ、この順に展開される。オリゲネスから遠ざかるにつれて、各教校長がいかにも独自性を見せたかを明らかにする手法が光る。たとえばピエリオスはオリゲネスと同様、霊の先在を主張し、これはオリゲネスに対する絶対的な信奉を意味する。一方オリゲネスとペトロスの間にはキリスト論をめぐる大きな相違はないが、前者が無化を強調するのに対し、後者は受肉の意義に重点を置く。総じて、教校の後継者たちはオリゲネスを信奉したに違いないが、実際にアレクサンドリア司教の座に就く者の場合、教会一致の問題との板ばさみになり、オリゲネス主義を全うできない者が現れる。一方、アレリオス論争の発端は「永遠の古よりの子の誕生」の教説の諾否にあることが明らかにされる。

盲目のディデュモスにまで時代が下ると、『ヘクサプラ』などをめぐる文献学的な事項は意味が薄れ、ただ伝統的なアレゴリカルな読みだけが重要となる。エジプトに開花した修道制は、アレクサンドリアの神学と無縁ではありえない。教校は次第に修道士の神学校と化し、ディデュモス以降、単に学問研究のうえでの指導者的な存在は現れなくなった。修道制への傾斜を強める中で「アポフテグマタ」の収集も行われるようになり、この延長線上にエヴァグリオス・ポンティコスが現れる。エヴァグリオスにおける「8つの悪霊」説の原典は、ユダヤ系資料もしくは新約聖書を用いたものにあるとされる。一方『ケファライア・グノスティカ』には新プラトン主義的・プロティノス的な要因が見られる。エヴァグリオスはクレメンスの著作を知悉していたが、その一方でボルピュリオスの『イサゴゲー』的な範疇の用い方にも通じていた。総じて、エヴァグリオスがどの点でオリゲネスを奉じ、またクレメンスに近づき、あるいはボルピュリオスを用いているかを明晰に腑分けしてゆく手法が光る。

この種の書にあっては、往々にして、煩瑣な歴史的考証と高度な観想性とは合致しないケースもありうる。だが本書は、原典および最小限の二次文献を用いて、概念的な展開を追いつつ思索を込める手法が規範的であり、高度な水準を維持しつつも基礎的である。概念の緻密な検証が不可欠な領域であるだけに、ハンガリー語による哲学表現の精髓を堪能させてくれる書でもある。良い意味で西欧とは一線を画し、独自性を維持する東欧諸国の教父学研究は、わが国の教父研究にも今後大いに裨益するものと確信する。なお、評者のハンガリー滞在中快く本書を賞与された、ニレジハザ市

のギリシア・カトリック神学院在籍 Verdes Miklós 氏に厚く御礼申し上げる。

Annemaré Kotzé,

Augustine's Confessions: Communicative Purpose and Audience,
Supplements to *Vigiliae Christianae*,

vol. LXXI, Brill, 2004, pp. xi+279

松 崎 一 平

周知のように、アウグスティヌスの『告白』全13巻は、第1巻から第9巻までは自伝的部分で、記憶について論じる第10巻を挟み、第11巻以降の3巻は創世記第1章-第2章冒頭の詳細な、いわゆる比喩的解釈からなっている。近・現代において『告白』は一般に自伝として受け取られ、第10巻以降との整合性について疑義が出されてきた。また、自伝的部分の記述について、その歴史性が問題にされることも多い。あるいは、主に神学や歴史の研究者が『告白』に関心をもってきたこともあって、その関心におうじて、ある部分を取り分けて分析したり論じたりすることが多く、『告白』全体を文学作品として一体的に考察することは稀である。しかしながら、卓越した修辭学者であった『告白』の著者が、何の構想もなく『告白』を書いたはずはない。1600年の時を隔てる現代の読者や研究者には理解するのに大きな困難が伴っても、アウグスティヌスは何らかの意図 (communicative purpose) をもって同時代の読者 (著者は audience と呼ぶことを好むので、以下「聴衆」とする) に向けて、全13巻を一体のものとして書いたはずである (『再論』の記述もそれを支持する)。本書の著者 Kotzé は、ある明確な意図のもとに書かれた統一ある文学作品として『告白』を理解すべきであるとし、その意図を明らかにすることを試みる。

著者は Preface に続く Introduction で、問いのかたちで予め仮説を立てる。『告白』はどの程度までアウグスティヌスの時代に人気があった protreptic なジャンルに合致